

## 令和7年夏季特別展「松平春嶽と勝海舟」みどころ講座

福井市立郷土歴史博物館

学芸員 山田 裕輝

はじめに

幕末期における「海軍」研究の進展

一般的な「海軍」のイメージ

→「艦船を統轄し、海上の軍事を担う軍隊」（神谷大介『幕末の海軍』）

⇒海軍＝軍事力

2000年代までの研究 →明治海軍の質を基準とした評価

┌「未熟」な幕末海軍 …階級主義の不徹底、指揮命令系統の不統一

└「輸送部隊」 …兵員や物資輸送を主とした運用（三谷博『明治維新とナショナリズム』）

2000年代以降の研究

┌近世水軍との連続性 …平時は海運、有事は軍事、という運用思想

└社会・地域への影響 …交通網の発達、機械化の進展、軍港の整備

┌明治海軍の基盤 …海軍人材の育成、国家規模の海軍構想

→幕末期の海軍が持つ固有性に注目・評価

⇒明治海軍の建設を円滑化した「貯金」（金澤裕之『幕府海軍』）

改めて注目される勝海舟の海軍論

嘉永6年（1853）の海防建白書

┌人材の登用 …将軍の御前で政治・海防問題を議論

└海軍の運用 …軍艦による海外交易→利潤で新艦整備

┌教練学校の設置…西洋兵制の採用、天文学・地理学・物理学・兵学

└武器・硝石の増産 …弾薬需要への対応

→財政難・技術力不足・人材難に悩む幕府への的確な意見

⇒幕末期の海軍建設における固有の問題を鋭く見抜いた勝海舟

勝海舟の「一大共有之海局」論（文久3年）

┌国家規模の海軍建設

└出身・身分を問わない人材登用

┌能力主義に基づく人事

→幕府・諸藩が一致して国難を乗り切る結集軸としての海軍

⇒政事総裁職松平春嶽の政治理念と共鳴。海軍建設が挙国一致を実現できる政策として春嶽らに重要視されるように。

春嶽公へ参上、拝謁。云、当今形勢ここに到れり、真に御憤発、天下御万解、正大の一是に帰せざれば、割据近きにあらん云々を申す。侯に神戸操練局の事、并（ならびに）天下の海軍を立て、普（あまね）く諸藩と士民とを論ぜず人物を集め、其器に応じ、将となし、士となし、門地の旧弊を止め、學術を以て募り、皇国興起の一大海局と成さんことを申す。侯、大に御同意なり。

勝海舟「幕末日記」文久三年十月二十日条

- ・No.2 勝海舟『海軍歴史』（松平春嶽献呈本、明治22年刊）
- ・No.3 松平春嶽宛勝海舟書簡（明治22年11月9日） いずれも福井市春嶽公記念文庫（当館蔵）  
→海軍省の依頼を受けて勝海舟が編纂した幕末期の海軍建設を総括する歴史書（No.2）。春嶽へ献呈する際に海舟が添えた送り状が遺る（No.3）。

## 第1章 海軍草創

### 福井藩の藩政改革

#### 松平春嶽の藩主就任と改革

- 財政再建 …… 倭約・綱紀肅正
- 海防の整備 …… 水戸藩主徳川斉昭の影響
- 軍事改革 …… 西洋科学技術の導入

- ・No.4 Slag bij Solebay, 1672（ソールベイの海戦）1848～55年頃版行、福井市春嶽公記念文庫（当館蔵）  
→19世紀のオランダ人画家 Petrus Johannes Schotel が描いた第3次英蘭戦争のイギリス・オランダ両海軍の海戦。  
→松平春嶽の所用品。本図のような海景画を通して海軍の具体的なイメージを形成したか。
- ・No.5 越前国浦々ノ図 弘化年間（1844～48）頃、松平文庫（福井県文書館保管）  
→大谷浦（南越前町）から崎浦（坂井市）までの計16浦の姿を描く。  
→浦の地形、岩礁の有無、民家の様子を色鮮やかに描くとともに、湾内の水深や間口、物見や台場の位置を記すなど、海岸防備の実用を意識している。  
→南越前町今泉には「御台場跡」として史跡となっている。
- ・No.6 早坂文嶺筆「米人渡来之図」 嘉永7年（1854）8月、個人蔵（当館寄託）  
→嘉永7年4～5月にペリー艦隊が箱館に来航・上陸した様子を描く。  
→本作の作者である早坂文嶺（1797～1867）は、仏画やアイヌ絵の名手として知られる松前城下の画家。ペリー箱館来航の姿を描いた絵画資料は少なく、職業画家が描いた作品として確認されたのは本作が初と思われる。
- ・No.8 合同舶入相秘記 嘉永7年（1854）、福井市春嶽公記念文庫（当館蔵）  
→嘉永7年正月にペリー艦隊が江戸湾に来航した際、艦隊の動静、外交交渉の模様、福井藩が担当した品川御殿山警固の詳細を記した春嶽の記録。  
→本牧沖に進入したペリー艦隊の様子や、福井藩士佐々木権六が写し取った船内の見取り図を含んでおり、蒸気船に対する春嶽の高い関心がうかがえる。
- ・No.10 洋式帆船一番丸関連史料 幕末期（19世紀後半）、松平文庫（福井県文書館保管）  
→福井藩が建造した西洋式帆船「一番丸」建造の関連資料。  
→一番丸は「カッター」（オランダ名：コットル）型と呼ばれる一本マストの小型帆船で、製造方頭取佐々木権六を中心として研究が進められた（No.10-1）。  
→部品図には西洋軍事技術導入の先駆者である伊豆菰山代官江川英龍の家臣岩嶋源八郎の名前がみえる。福井藩の技術導入ルートの一つか。

- ・No.12 旅泊のすさみ 安政6年(1859)、松平文庫(福井県文書館保管)  
→福井藩の西洋式帆船「一番丸」初航海時の航海記。4月21日に三国湊を出発し、6月13日に福井藩中屋敷がある江戸霊巖島に到着するまでの航海の様子と各地の見聞記を収める。  
→途中で立ち寄った萩では、「長州産物」として苧・蠟・石炭などの産物を列挙する。長州藩との将来的な産物交易を構想していたか。

## 大野藩の藩政改革

藩主土井利忠の藩政改革と積極事業

- |                                                                                          |                                                                                               |
|------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>俸約・国産奨励(天保元年～)</li> <li>西洋軍制の導入(嘉永3年～)</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>藩営商店「大野屋」の開設(安政2年～)</li> <li>樺太開拓の申請(安政3年～)</li> </ul> |
|------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------|
- 藩士内山七郎右衛門・隆佐兄弟が中心となり実施。

- ・No.14 伊藤慎蔵『颶風新話』 安政4年(1857)6月刊、当館蔵  
→安政2年12月に蘭方医緒方洪庵の適塾で塾頭を勤めた伊藤慎蔵(長門国出身)を蘭学教授として大野藩に招聘。  
→伊藤を中心に、『海上砲術全書』や『築城兵書』などの西洋軍事技術書を出版。『颶風新話』も海洋での暴風と航海術との対応を説いた技術書。  
→藩の軍事改革や樺太開拓と連関し、洋学の振興が進む。

- ・No.15 岡不崩筆「大野丸図」 大正10年(1921)、柳廼社蔵(大野市歴史博物館寄託)  
→樺太開拓の人員・物資運搬のため、箱館で建造中の洋式帆船「箱館形」を大野藩が取得。安政5年6月に「大野丸」として完成。  
→元治元年(1864)8月28日に根室沖で遭難・沈没するまで、越前～箱館間の移動は史料で確認できうるだけで計14回。  
→「出群の所置」として大野藩の名声を高めることに。

## 第2章 海軍興起

幕府の海軍振興と勝海舟の台頭

▼伊勢の豪商・竹川竹斎との交流 →海運や財政の視点から海軍建設を考える発想の獲得

▼長崎海軍伝習への参加(安政2～6年)

→海軍の専門家として幕府内外から認知。福井藩との交流も伝習参加中の安政4年ごろからか。

- ・No.18 松平茂昭宛松平春嶽書簡 万延元年(1860)5月16日、越葵文庫(当館保管)  
→海舟が咸臨丸でアメリカから帰国した直後の書簡。  
→春嶽は「昨年中」より海舟を「格別御世話」申し上げた人物だと述べ、関係維持のため海舟に進物を贈るよう茂昭に助言。  
→安政6年(1859)段階で、春嶽と海舟が密に交流していたことが分かる。

- ・No.21 松平茂昭宛松平春嶽書簡 文久2年(1862)閏8月7日、越葵文庫(当館保管)  
→松平春嶽は文久2年7月に幕府の政事総裁職に就任。  
→政治顧問に迎えた熊本藩士横井小楠の「国是七条」に基づき、将軍家茂の上洛、参勤交代制の緩

和、賢才拔擢、言路洞開、海軍振興などを掲げ、文久の幕政改革を主導。

→重大事件を決議する際には将軍家茂臨席の下で御前評議を基本とし、将軍と幕府官僚が一致した改革の実行を目指す。

- ・No.22 家譜 茂昭（蒸気船黒龍丸の購入） 文久3年（1863）5月29日条、越葵文庫（当館保管）

→福井藩初の蒸気船として「黒龍丸」を入手。

→しかし、黒龍丸に搭載されたスクリュー推進機関は日本国内での維持補修が困難。

→福井藩は黒龍丸の運用を諦め、翌元治元年に幕府へ売却。

⇒幕末期日本の整備インフラの未熟さを象徴

- ・No.24 クロノメーター（松平春嶽所用） 江戸時代後期以降

- ・No.25 アネロイド気圧計（大野規周作、松平春嶽所用） 明治5年春

- ・No.26 角度計（大野規周作、松平春嶽所用） 江戸時代後期以降

- ・No.27 方位測定儀（松平春嶽所用） 江戸時代後期以降 いずれも福井市春嶽公記念文庫（当館蔵）

→遠洋航海では天測により緯度と経度を測定して船の現在位置を把握する必要があるが、経度は時刻と太陽の位置を用いて測定するため、揺動する船の上でも正確に時を刻むことのできる高精度時計が求められた。

- ・No.29 横井小楠宛大久保忠寛書簡 文久3年（1863）4月6日、当館蔵

→大久保は御用取次として春嶽の幕政改革に賛同。また、横井小楠の「公共」思想に共鳴して幕府の政権返上論を主張するように。

→本書簡では、大久保が坂本龍馬を「大道」を理解する人物として見込んだこと、さらに龍馬に現状打開のため働いてくれるよう依頼。龍馬に春嶽宛の書簡を託して江戸を出立させたことを記す。

→ここでの「大道」は大久保持論の政権返上論と見られる。

- ・No.32 松平春嶽宛勝海舟書簡 元治元年（1864）2月6日、当館蔵

→文久3年12月晦日に朝議参預を命じられた春嶽に対し、「断然」たる決断をするよう申し入れる

→海舟は幕府有司の中には見識の狭小ゆえに将軍家茂の意志に反している者がいると述べ、彼らの「浮説」には惑わされず非常の卓識をもって決断を下し、実事に反映してほしいと訴えた。

- ・No.33 勝海舟宛松平茂昭書簡 元治元年（1864）9月9日、越葵文庫（当館保管）

→禁門の変により朝敵となった長州藩征討のため、8月4日に征長軍副総督を命じられた福井藩主松平茂昭の書簡。

→この時、征長軍総督がまだ決まっておらず、上京した茂昭は事態に困惑。諸藩の輿論を加味し、征長のためには将軍家茂の上洛が必要なのではないか、と海舟の意見を問うた。

- ・No.34 松平茂昭宛勝海舟書簡 元治元年（1864）9月12日、越葵文庫（当館保管）

→No.33 に対する勝海舟の返書。

→海舟は「何之思慮も相与からず」と一線を引きつつも、老中阿部正外ならば「甚覚悟も宜敷」とほめ、阿部との相談を勧めている。

- ・No.35 荻野小四郎宛勝海舟書簡 慶応2年(1866)4月29日、当館蔵  
 →荻野小四郎は福井藩の家老職見習。海舟が神戸海軍操練所の問題で軍艦奉行を罷免されて家計に窮していた際、春嶽が勝へ支援金を贈るきっかけを作った人物。  
 →本書簡は海舟の全集類には収録されておらず、本展が初公開。  
 →海舟が「先年米国航海」の際に同地から持ち帰った「英織蚊帳地」を春嶽に贈る旨を記す。
  
- ・No.36 登坂心覚 慶応2年(1866)6月4日条、福井市春嶽公記念文庫(当館蔵)  
 →第二次征長のため大坂行きを命じられた春嶽が、福井出発から畿内滞在時の諸活動を書き留めた自筆記録。  
 →春嶽と海舟は第二次征長には消極的な立場。特に春嶽は將軍進発後の市中動揺を懸念しており、諸藩や志士たちに人望のある海舟を「海軍惣督」として進発後の摂海防禦に起用するよう提案。
  
- ・No.37 松平春嶽宛勝海舟書簡(写) 慶応2年(1866)10月2日、当館蔵  
 →第二次征長のさなか、7月20日に將軍家茂が病死。征長の指揮は一橋慶喜が引き継ぐも、8月10日に小倉口の幕府軍が壊滅したために慶喜は停戦を決断。海舟が密使となり長州藩と停戦を締結。  
 →本書簡では、停戦後の小康を得たことで幕府内に再び「雑説」が生じてきたと春嶽に嘆いている。
  
- ・No.38 勝海舟意見書 慶応4年(1868)1月、越葵文庫(当館保管)  
 →第二次征長の停戦交渉後、海舟は江戸に戻り軍艦奉行として幕府海軍の整備に専念。そのさなかに鳥羽・伏見の戦いが勃発。旧幕府軍は敗退し、主君・慶喜は追討の対象に。  
 →海舟は新政府が問罪の兵を出すことに反発。現今の情勢下での内乱は西洋諸国に付け込まれるだけと断じ、春嶽を含む新政府の参与たちを「公平を唱えて大私を挟」むものと厳しく批判。

### 第3章 両雄余影

明治期の松平春嶽と勝海舟

#### ▼公職からの引退

- 春嶽 …大学別当・侍読を辞任(明治3年)
- 海舟 …元老院議官を辞任(明治8年)

→双方ともに東京在住。邸宅や書簡の往復など密に交流

#### ▼徳川家・旧幕臣への支援 →名誉回復・生活支援に尽力

- ・No.43 礪川文藻 明治11年(1878)4月14日条
- ・No.44 勝海舟編『亡友帖』 明治11年(1878)刊 いずれも福井市春嶽公記念文庫(当館蔵)  
 →勝海舟が明治11年4月14日に春嶽へ贈った献呈本。春嶽の自筆日記「礪川文藻」(No.43)でも同日に海舟からの献呈が記される。
  
- ・No.45 武田正規宛勝海舟書簡 明治19年(1886)10月3日
- ・No.46 酬恩義会要旨并仮規則 明治19年(1886)刊 いずれも越葵文庫(当館保管)  
 →「酬恩義会」とは、上野寛永寺と芝増上寺にある徳川家廟所の修理・保持を図るために結成した旧幕府の互助組織。海舟は会長として会の運営・維持に尽力。

→No.45 は、No.46 を配布する際に海舟が添えた書簡（初公開）。武田正規は旧福井藩士で、伯爵を授爵された越前松平家の家令。

・ No.47 勝海舟筆「吉宗公御教訓書」の巻軸 明治 19 年（1886）11 月、越葵文庫（当館保管）

→8 代将軍徳川吉宗が側衆渋谷良信に語ったという、吉宗の政治観人材観の逸話を勝海舟が筆写したもの。冒頭には春嶽の揮毫「政清人和」を併せる。

→海舟は明治 20 年前後の著作で吉宗を「中興の英主」と繰り返し絶賛。当時、政治家間の不和がささやかれていた薩長藩閥政府への不満を吐露したとも受け取れる。

・ No.49 松平春嶽追悼の和歌短冊 明治 23 年（1890）6 月、越葵文庫（当館保管）

→春嶽の霊前に海舟が捧げた和歌短冊。

→旅立つ春嶽の靈魂を「まごころのみたま」と称え、そのまごころが光となって世に降りそそぐことを願ったと解されよう。

→30 年以上にわたり春嶽と交流を続けてきた海舟の想いがこめられた作。